

『美しくも呪われた人』について

—そのテーマをめぐって—

上 藤 礼 子

I

F・スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 1896-1940) の二番目の小説『美しくも呪われた人』 (*The Beautiful and Damned*, 1922) は、処女作『楽園のこちら側』 (*This Side of Paradise*, 1920) に続く作品である。第一作は、中西部出身の若者が東部の有名大学に入り、大学生活を通して文学を知り、男女の様々な友人たちとの交遊を通して人生に開眼する物語であった。そして、主人公アモリー・ブレーン (Amory Blaine) が、短い軍隊生活を経て、戦後の混乱の中に投げ出され、貧しさゆえに恋に破れ、自分たちにはもはや信ずべき神も、依存すべき伝統も失われてしまったことに絶望するところで物語は終わっていた。

フィッツジェラルドは、第二の長編においては、主として前作の終わった後の時代に焦点を合わせながら、金持ちの青年の結婚生活を中心にして物語を進めている。すなわち、『美しくも呪われた人』は1920年代、作者自身が名づけたいわゆる「ジャズ・エイジ」を背景として、アンソニー・パッチ (Anthony Patch) とその妻グロリア (Gloria) が、戦後の好況に沸く一方で腐敗と墮落の様相が一層ひどくなるムードの中で、時代の重圧に耐えきれず、彼ら自身もまた墮落してゆく物語である。アンソニーとグロリアは、フィッツジェラルドの多くの作品に見られるような、金持ちで美しい人々、若くて魅力的ではあるが驚くほど身勝手に放縦な性格の持主である。この小説はこのような二人が出会い、結婚し、放蕩の限りをつくしたあげく、泥沼のような生活に陥ってゆく八年間を物語っている。

特にアンソニー・パッチは、作者の言葉を借りるならば、“one of those many with the tastes and weaknesses of an artist but with no actual creative inspiration”⁽¹⁾である。

アンソニーの大学時代からの友人モーリー・ノーブル (Maury Noble) とリチャード・キャラメル (Richard Caramel) も、物語の初めの部分では前途有望な若者であるが、物語の終りの部分では二人とも理想を放棄し、物欲に負け、パッチ夫妻と同様に墮落してしまう。

その生きざまはいろいろであるとしても、フィッツジェラルドの作品の主人公は、大抵の場合、人生に失敗するというのが特徴であると思われる。『美しくも呪われた人』の場合も例外ではないといえよう。しかしこの小説を一読したとき、登場人物たち、とりわけアンソニーとグロリアの結婚生活の失敗が、真の悲劇として読者の共感をよぶだろうか。少なくとも、アンソニーとグロリアの半生をよく考察してみると、彼らを悲劇的な人物として考えることには多くの点で疑問があるように私には思われるのである。この作品に致命的な欠陥があるとすればこの点にあるといえないだろうか。

フィッツジェラルドはこの物語が、一般読者のみならず、批評家からも高く評価されることを期待していた。実際、この小説は出版初年度に43000部もの発行部数をあげたとされている。しかし『美しくも呪われた人』が、前作と比較すればはるかに小説らしい小説となっていることは認めながらも、作品のいくつかの技法上の欠陥のために、必ずしも成功作とはいえないという低い評価を与えている批評家もいる⁽²⁾。

ウィリアム・トロイ (William Troy) は、この小説を「敗北の研究というよりも敗北の雰囲気の研究——つまり、それによって測られる価値観がないために、いかなる道徳的判断も下せない世界の研究である⁽³⁾」と、手きびしく評しているほどである。このような批評はこの小説に対するフィッツジェラルドの意図、あるいは作品の主題が不明確であるということになるだろうが、それは適切な意見であろう。換言すれば、膨大な作品全体の展開の中で、作者の技法が未熟なため

に、彼の意図と主題が散漫なものになってしまったことに起因していると考えられる。

以下、私はこの小論において、この作品におけるフィッツジェラルドの意図と主題は何であるのか、また作者は彼の意図した主題を読者に充分納得させるのに適切な表現形式を用いているのか、ということについて具体的に考察してみたい。それでは、フィッツジェラルドのこの作品に対する意図と主題はどのようなものであろうか。

II

フィッツジェラルドがこの小説で意図したのは、彼が自らの人生体験を通して感じとってきた「不幸の気味」——“a touch of disaster”を中心に置こうとしていたことは、多くの批評家の指摘しているとおりにだと思われる。彼は後年発表したエッセイ「若き日の成功」(“Early Success”, 1937)の中で、次のように述べている。

ぼくの頭に浮かぶ全ての物語はその中に不幸の気味を持っていた——ぼくの小説の美しい若者は破滅し、短編小説のダイヤモンドの山は吹き飛び、大金持ちはトマス・ハーディの小作人のように美しくも呪われていた⁴⁾。

確かに、アンソニーとグロリアの結婚生活は破滅の影を宿しているし、物語全体が不吉なトーンにおおわれている。

同時にまたフィッツジェラルドは、それまでの長短編と同様に、この作品においても物語の悲劇性を高めるために、作品の時代背景として第一次大戦後の繁栄と混乱を併せ持ったアメリカ社会の一面を描いている。その中で若い男女が結婚生活に失敗してゆく過程を中心に物語を進めようとしたことは間違いない。そしてこのことは、1920年8月にスクリブナー氏へ宛てた彼の手紙の中でも明らかである。

ぼくの新しい小説は・・・アンソニー・パッチの25歳から33歳(1913—1921)の生活に関

係している。彼は芸術家的な趣味と弱点を持っているが、何ら実際の創造的インスピレーションを持たない、あの多くの人々の一人である。彼と彼の美しく若い妻が放蕩三昧の果てに、いかに破滅させられるか、ということが語られる⁶⁾。

彼の意図した主題がこのようなものであったとしても、それが作品の中で充分明確に語られているかどうかは疑問の余地があるだろう。その疑問とは何かということを考えなくてはならないが、その前に物語のプロットを簡単にたどってみよう。

『美しくも呪われた人』はアンソニー・パッチの道徳的、肉体的墮落に焦点を当てている。25歳のアンソニーは、祖父アダム・パッチ (Adam Patch) の莫大な財産を手に入れることと、美しいが妖婦的な女性グロリアに求婚することに情熱を注ぐ。彼は非常にダンディで、豊かな感受性を備えたディレッタントである。20歳でハーバードを卒業したアンソニーは、学生時代は「ややロマンティックな人物で学者、^{レクチャー}隠遁者、群を抜いた博学の徒⁶⁾」とみなされていた。

登場人物に象徴的な名前をつけるのは、フィッツジェラルドの特徴の一つであるが、この作品にもその例が見られる。アンソニーは彼の名前が示すとうり、色々な物事に対して相対立する態度と、はっきりと定まらない大望とを併せ持つ、作者が皮肉にもアンソニー・パッチと命名した人物にふさわしい、いわばパッチワーク的な若者である。彼は大学卒業後イタリアへ遊学中、気まぐれに絵を描いたり、バイオリンを弾いたり、イタリア語でぞっとするようなソネットを書いてみたりと、様々な美しいものを勝手気儘に追求する。

祖父の急病でアメリカに戻ったアンソニーは、彼の奇跡的な回復によって、財産相続の夢を一時延期することを余儀なくされた。そこでニューヨークの豪華なアパートに落ち着いて、母親の遺産の利子 7000 ドル弱とクリスマス毎に祖父から送られる500ドルの株券との年取をもとに、怠惰で気儘な生活を楽しむことになる。この頃彼は代表的なフラッパーの一人であるグロリアと知り合う。キャンザスの田舎育ちでありながら、「国中で一番有名で人気のある若い美人」(81)であるグロリアは、アンソニーにとっては祖父の財産よりはずっと手に入れやすい存在であ

る。

彼女は、フィッツジェラルドの多くのヒロインたちと同様に、自分の肉体の若さと美貌にしか関心を持たない女性である。したがってアンソニーとの結婚にあたっては、夫らしい夫ではなくて、一時の情熱的な恋人と結婚したいと考えるのである。彼女にとって「女とは、男の人と美しくロマンティックにキスをすることができればいいのであって、妻や愛人になりたいと望む必要はない」(113)のである。言ってみれば、グロリアには結婚に対する責任感はいささかなく、結婚とは彼女が華やかなスターの役割を演じる劇にすぎず、自分の生活を子供たちのために奉げるなどはまっぴらだと考えるのである。

他方、彼女の美しさに夢中になっているアンソニーにとって、グロリアは唯一絶対の存在で、「もし彼女と結婚しなければ、彼の人生は青春の弱々しいパロディになってしまう」(119)のような気がする。彼は「彼女の非常な不動性の中に安らぎを見出したい」と思い、「彼女は全ての不安と全ての不満の終着点」(107)だと考えるのである。

二人は、申し分のない美しいカップルとして、目的のない行きあたりばったりの幸福を追い求めようとする。彼らは、優雅なまでに怠惰な生活を求める点で一致しているために、しばらくの間は互いの本質的な違いに気づかない。アンソニーの収入以上の生活が破綻をきたし始めるまで、二人は永遠の愛と美という幻想に支えられて華やかな放蕩生活を繰り広げる。彼らは郊外に家を借りて、グロリアは理想的な召使にかしずかれ、アンソニーは祖父の財産を相続し、それを完成すれば自らの存在理由を見出せるかもしれないルネサンス期のローマ法皇についての著作を行いたいと考える。しかし結局この夢は実現せず、目的を持たない単調で安逸な生活は、果てしなく繰り返される酒盛り騒ぎへと墮落してゆく。

そして彼らの輝かしい未来への夢は、祖父が突然パーティに姿を現わしたことによって、もろくも崩れ去る。有名な社会改革主義者で禁酒法の熱烈な支持者であるアダム・パッチは、アンソニー夫妻の放蕩三昧の生活ぶりに腹を立て、遺言状から彼の名前を抹消して急死してしまう。当然自分のものと思っていた莫大な

財産が1セントも手に入らないと知ったアンソニーとグロリアは、遺産請求の訴訟を起こす。しかし自分たちの金をほとんど使い尽くしていた二人はみじめな貧困生活を余儀なくされる。不馴れな耐乏生活にうまく対処できないため、彼らの道徳的、肉体的墮落は急速に進行する。アンソニーは出征中に南部娘ドロシー・ライクロフト (Dorothy Raycroft) と関係を持ち、グロリアは夫の留守中に昔の恋人に会って孤独を忘れようとするのである。

数年間の金のかかる、勝訴の見込みのない裁判闘争の結果、アンソニーは3000万ドルの遺産を相続することになる。しかしその間に二人の心は一層離れてゆき、また、恐ろしい報復をうけることになる。すなわち、グロリアは決して自分を裏切らないと信じてきた若さと美貌を失い、アンソニーは肉体的にも精神的にも崩壊してしまう。大金持ちになった二人はヨーロッパへ旅立つ。その船上でアンソニーは、グロリアにまで背かれた苦しかった日々をふり返って、涙を浮かべながら独語する。「ぼくは奴らに目にもものを見せてやった!・・・つらい戦いだったが、ぼくは屈服しなかった。ぼくは勝ったんだ!」(449)

III

『美しくも呪われた人』でまず感じることは、フィッツジェラルドの従来の長編や短編と同様に、ジャズ・エイジの狂乱的な雰囲気と、無軌道な若者たちが旧来のモラルに挑戦しようとしている姿である。飽くことなく繰り返される乱痴気パーティの描写、戦後派の若者のソフィスティケイティッドな会話や行動など、これらはまさにフィッツジェラルド的世界の典型であり、彼の作風をいかんなく発揮していると思われる。ただフィッツジェラルドは戦後派の若者の反逆というテーマを、この作品においては、アダム・パッチ対アンソニーとグロリアという形で提示している。しかもこの対立の中に人生における金のもたらす影響を複雑にからませている。

アダム・パッチは一代の間にウォール街で7500万ドルという巨万の富を築き上

げた立志伝中の人物である。彼は勤勉と秩序、道徳性といった古いアメリカの伝統の価値観を重んじる超保守的な人物である。

・・・彼はひどい硬化症の発作の後、世の中の道徳の刷新に余生を捧げる決心をした。彼は社会改革主義者の中の社会改革主義者となった・・・彼は酒や文学、不道徳、特許売薬、日曜日の劇場に対して、様々なアップercutやボディブローを浴びせかけた。ついにはごくわずかのものを除いて、ほとんど全てのものを覆う狡猾な徹の影響のもとで、彼の精神は時代のあらゆる憤りに猛然と挑んでいった。(4)

それに対して、アンソニーとグロリアは飲酒とパーティに明け暮れる放蕩三昧の生活を楽しもうとする。彼らは“gracefully idle” (65)な生活を送ることによって、祖父に象徴される旧来の価値観に挑戦するのである。アンソニーの怠惰で享楽主義的な生活の基礎となっているのは、“The Meaninglessness of Life” (54)という彼の人生哲学である。彼は人生は無意味だと考えるために、人生に対して何の野心も願望も抱くことができない。彼はもし自分つまらない平凡な男であれば仕事をしなくてはならないと考える。しかし自分を他の誰よりもすぐれた人間だと考えるために、この世の中には「自分がするだけの価値がある仕事はない」——“there’s nothing I can do that’s worth doing” (65)と思うのである。彼は働くことに少しも意義を見出せず、「人がなぜ、若者は全員ダウンタウンへ出かけて行って、人生の最良の20年間を1日に10時間も退屈で想像力のない仕事、確かに利他的ではない仕事に従事すべきだと考えるのか」(65)理解できない。そのため、週に1回祖父を訪問し、2回株のブローカーの所へ、3回仕立屋へ行く他には、友人たちと食事をしたり、知的ゲームにすぎないソフィスティケイティッドな会話を楽しんだり、または女友達とのデートに時を費やす。

このようなアンソニーの生活を支えているものは金であるが、それは自分が働くことなしに得る金、つまり相続財産である。正確には母親の遺産と、予想される祖父の莫大な遺産に対する期待である。フィッツジェラルドが多くの作品の中で金の問題をとりあげていることは周知のとおりである。アーサー・マイズナー (Arthur Mizener) は、フィッツジェラルドは人が^{グッド・ライフ}よい生活を営むためには富が

必要だと考えていたと言っているが⁽⁹⁾、これはアンソニー・パッチの場合にもあてはまるであろう。

アンソニーとグロリアは祖父の金を手に入れたら、「避暑地から避暑地へと旅行して、豪勢な邸宅と多分可愛い子供たちのところへ帰り、それから外交官か政治家になって、しばらくの間美しく重要なことを成し遂げ、最後には白髪のカップルとして土地のブルジョワに尊敬されながら、静かな栄光に包まれることができる」(277)と考える。『偉大なるギャッツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)のギャッツビー(Gatsby)が悪戦苦闘し、密造酒売りになってまで金をもうけようとするのに対し、アンソニーは自分では少しも働こうとしないで祖父の財産を手に入れたいと考え。この点において彼は、フィッツジェラルドの多くの主人公の中では、異色の存在である。

アンソニーは金の持つ素晴らしい力、騒々しい粗野な世界から彼の生活の平和と静けさを保護してくれる力を充分に知っている。そのためにアダム・パッチの莫大な財産を自分のものにするのを切望するのである。しかし彼は祖父の金に執着する一方で、それを作り上げた祖父自身に対しては嫌悪と軽蔑の念しか抱かない。結局アンソニーの場合、人生は無意味だという彼の人生哲学は、哲学的な人生の解釈ではなくて、金を得るためにあくせく働くことの無意味さなのである。

物語の終り近くで、みじめな生活を送るアンソニー夫妻に、グロリアの友人ミュリエル・ケーン(Muriel Kane)が、あてにならない裁判を諦めて地道な仕事につくことを勧めるシーンがある。それに対してアンソニーは、“With me it’s simply a matter of pride” (408) であって、中産階級出身の彼女にはわからないことだと答えている。相続財産に価値を見出すアメリカの貴族的階級を自負するアンソニーにとって、当然自分のものとなるべき金が手に入らないことに異議を唱えることは、彼の立場に立てば、重要な意味をもつのではないだろうか。自分の当然の権利が、もともとは酒場の主人にすぎないシャトルワース(Edward Shuttleworth)のような男に阻まれることは許しがたいことであり、あってはなら

ないことなのである。

フィッツジェラルドは金持ちというものに対して幻想を抱いており、彼らの感覚は一般庶民のそれとは違っていると考えていたと思われる。後の短編「金持ちの青年」(“The Rich Boy,” 1926)の冒頭の“*They are different from you and me . . . unless you were born rich, it is very difficult to understand . . . Even when they enter deep into our world or sink below us, they still think that they are better than we are*”⁽⁶⁾ という考え方の芽生えが、ここに見出される。

人生は無意味だという考えは他の登場人物たちも持っている。たとえば、モーリーは“*I shall go on shining as a brilliantly meaningless figure in a meaningless world*” (23) と言い、グロリアは“*There’s only one lesson to be learned from life, anyway . . . That there’s no lesson to be learned from life*” (255) と主張する。

このようなアンソニーとグロリアは、飲酒とパーティに明け暮れる放蕩な生活によって、自分たちの生活を破滅に導き、最後には互いの愛情もすっかり冷えてしまう。これはまさに身からでた錆であって、そんな生活をしていればこのような結果となるのは自明のことである。にもかかわらずフィッツジェラルドは、祖父の遺産相続をめぐって耐乏生活を余儀なくされたアンソニーに300万ドルもの金を勝ちとらせ、物語のラストシーンでは、彼に「ぼくは勝ったんだ」と語らせている。アンソニーは絶望的と思われた裁判で逆転勝利を得て、世間に彼の生き方の正しさを証明したのだと言われても、読者には充分納得できないのではないだろうか。『美しくも呪われた人』に問題があるとすれば、まず第一に、この唐突ともいえる結末にあると思われる。

アンソニーとグロリアが浅はかな幻想に駆られて結婚し、道徳的、肉体的に墮落してゆきながら、最後に勝利を得たとしても、その過程には必然性が感じられない。少なくともフィッツジェラルドはこの間の十分な説明をしていないし、私にはこの結末は突然という感じがしてならない。この小説の主題が不明確である

というならば、それはこのことと深い関係があるのではないだろうか。

IV

『美しくも呪われた人』のもう一つの重要なテーマは、若さと美のはかなさの問題である。このことは、肉体の若さと美しさが失われることに対してグロリアが抱く恐怖にも近い感情として、最も明確に語られている。そんな彼女の感情をより説得力のあるものとするために、フィッツジェラルドはグロリアの美しさを繰り返し強調しようとする。“A Flash-Back in Paradise”の章では、彼女を「100年毎に新しく生まれ変わる美」——“Beauty, who was born anew every hundred years” (27) の地上に降り立った姿だとして、彼女の美しさが比べようのないものだということを読者に納得させようとしている。

「魂と精神が一つのもので、肉体の美しさが魂のエッセンス」(27) であるグロリアにとって、若さと美貌を失うことは耐えがたいことである。彼女の若さと美の喪失への恐怖感は、グレー・ハウスでの乱痴気パーティの夜に、彼女が突然家から飛び出してゆくシーンに象徴的に描かれている。アンソニーとの結婚生活によって自分の若さがどんどん失われていくような恐れにとりつかれたグロリアは、狂乱状態になって嵐の中を駈に向かってひたすら走り続ける。そのうち彼女は自分が子供のように身軽に走っているのに気づく。失われてしまったとばかり思っていた若さが実際には少しも損われていないことがわかって、彼女は世界が全て自分のものになったような幸福感にひたるのである。

グロリアの若さと美しさは、その後の放蕩な生活を経ても、外面的には少しも衰えをみせない。彼女は年よりもずっと若く見え、行くさきぎきで賞賛の視線に包まれる。彼女には “her beauty was all that never failed her” (393) とすら思えるのである。

しかし29歳の誕生日に、彼女は若さと美貌が失われてしまったことを思い知らされる。彼女は自分の絶対的な美しさを確信して映画界入りを希望し、かつての

恋人ブロックマン (Joseph Bloeckman) の紹介でフィルムテストを受けたものの、役柄に対して年をとりすぎていることを理由に断わられてしまうからである。あらためて鏡に映る自分の顔をながめてみれば、「頬はごくかすかながらふくよかさを失い、目尻には小さな皺がよっている。目も昔とは違っている」(404) のである。自分を裏切るとは絶対にありえないと信じてきた、彼女の永遠の若さと美という幻想はここに崩れ去ったのである。“Oh, my pretty face! Oh, I don't want to live without my pretty face! Oh, what's *happened*?” (404) という叫びにはグロリアの絶望的なまでの悲しみがこめられている。

このような美と若さのはかなさに対してフィッツジェラルドは異常なほどの関心を持っていたが、それは「冬の夢」(“Winter Dreams,” 1922) にも見ることができる。物語の最後の部分で、かつては自分の情熱の全てを傾けたジュディ・ジョーンズ (Judy Jones) が、くだらない男と結婚し、「女の人の多くはあんたふうの色香があせていくんですよ⁶⁾」と言われた主人公 デクスター・グリーン (Dexter Green) の傷心のシーンである。「彼は去ってしまい、もう二度とひき返すことはできなかったからだ。門は閉ざされ、太陽は沈んでしまい、終始変わることなく持続している鋼鉄のような灰色の美以外に、どんな美も残っていなかった。彼が耐えることができたかもしれない悲しみさえ、あの幻想の、青春の、豊かな人生の国、彼の冬の夢をほしいままにした国に、置き去られてしまったのだ⁶⁾」と、彼は慨嘆するのである。

それはまた、「感情の破産」(“Emotional Bankruptcy,” 1931) のヒロイン、ジョゼフィン・ペリー (Josephine Perry) が、恋人とのキスにすら何の感動も覚えられなくなって、浪費してしまった自分の若さと感情を哀惜する気持ちとも共通している。これは青春と美のはかなさに対するフィッツジェラルド独特の感情、いわゆる ‘Emotional Bankruptcy’ の考え方にもつながるものである。

以上述べてきた、人生の無意味さという問題と複雑にからみあった金の人に及ぼす影響と、若さと美のはかなさが、『美しくも呪われた人』の重要なテーマであると思われる。しかしこれは私の独断的解釈にすぎないかもしれない。色々な研

究書を読んでみても、この作品が膨大なものであるために、読者に散漫な印象を与え、主題が不明確となっている点が指摘されている。実際批評家によってこの作品のテーマとして、金のもつ腐食的な力、人生の無意味さ、若者の反逆など、色々な問題があげられているが、これはまさにこの物語の中で作者の意図した主題が明確に示されていないことを如実に示すものといえよう。

最後に、なぜこの小説が読者に鮮明な印象を与えないのか、という問題を考えてみたい。

V

一般に『美しくも呪われた人』の主題が何であるのかが曖昧だと考えられるのは、フィッツジェラルドが一つの作品の中にあまりにも多くのものを盛りこみすぎた点にあると思われる。彼は当時のソフィスティケイティッドな青年やフラッパーの生態を描きながら、そこにさまざまな問題を織りこもうと試みている。たとえばアメリカの富裕階級の貴族的意識や、若さゆえの反逆と幻滅、東部対中西部、北部対南部の対立意識、戦争とそれに責任のある世代の偽善などの問題である。

これらについて述べる時、フィッツジェラルドはその細部を強調しすぎたために、読者の関心を本来の問題からそらせる結果となったのである。このことに関しては、ジョン・ピール・ビショップ (John Peale Bishop) に宛てた手紙の中で、「ぼくは一般計画を考えるよりも、作品の細部を書くことにはるかに多くの関心を注いだ⁶⁾」と、作者自身も認めている。その一般計画がどういうものであったのかはわからないが、少なくとも、この小説が作者の意図どおりのものになっていないことは確実である。

細部を強調しすぎた例としては、アンソニーにとりついた死の影のモチーフがあげられるだろう。物語の冒頭で彼の経歴を語る時、父親の死以来、「彼には漠然としたメランコリーがつきまとうことになった」(6) とか、「アンソニーにとっ

て、人生とはあらゆる場所に待ちうけている死との戦いであった」(7)と、いかにも意味ありげに書いている。しかしこの不吉な影はすぐに作品の表面から姿を消し、彼の放蕩三昧の生活の中にはその気配すら感じられないのである。

また、重要でない登場人物の詳細な紹介のために、物語の展開が遅れることも目につく。グロリアの父親は娘を理解できない無力な父親として、一回登場するだけの人物であるもかかわらず、フィッツジェラルドは彼の経歴を詳述している。そのためにグロリアの登場が遅れて、彼女に対する読者の期待がそがれる結果となっている。

さらに、エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) の言うように、フィッツジェラルドが小説技法に一つの変化を試みたことも、主題の明確さを欠いた一因となっているかもしれない。ウィルソンによれば、フィッツジェラルドは、作家として創作活動を始めてから、「皮肉で悲観的」——“ironical-pessimistic”な文学の流派を知るようになり、彼らの創作態度を作品の中に持ちこもうとしたのである。それは「悲劇と、メンケンが『人生の無意味さ』と呼ぶものを重視するといったたぐいのものである。この時まで、フィッツジェラルドは、小説を書くことは人生に意義をもたらすことだと考えていた。しかし今や彼は勇敢にも、100パーセント無意味であるべき破壊的な悲劇を考案することに着手した¹⁰⁾」のである。

これらの問題に加えて、作品の構成も主題を不明確にした原因の一つになっていると思われる。『美しくも呪われた人』は、3部9章から成り、形式的にはよく整った作品となっている。『楽園のこちら側』と比べれば、視点も比較的統一され、作品全体のトーンも一貫している。しかし、前作の影響も一部残っており、“Symposium”の章でのモーリーの長大なモノローグや、数ヶ所のいわゆるドラマ・スタイルの表現などは、その顕著な例であろう。特に後者に関していえば、マイズナーが指摘しているように、作者はそこに何か特別な利点があると考えていたかもしれないが、実際の効果ははなはだ疑問と言わざるをえない。ただ、“A Flash-Back in Paradise”の章は、読者の笑いを引出すという点では、成功しているといえなくもない。

この小説は、構想の段階では、作者の意図と主題がかなりはっきりとしていた。しかし完成した作品としては、主題は何かということを、一読しただけで把握することが困難になっている。これは、上述のとうり、作者が作品の中に多くの問題を盛りこみすぎたこと、細部を書きこみすぎたことから生じている。そのために作品が膨大ものとなり、主題が不鮮明であるという批判を受ける原因ともなっている。

独立した文学作品において、主題が不明確であるということは致命的な欠陥である。この点で『美しくも呪われた人』を失敗作とする批評は当然のものといえよう。だが、アンソニーとグロリアの生活を、処女作で成功し、ゼルダ (Zelda Sayre) と結婚した後の作者自身の生活、連日パーティに明け暮れ、五番街をタクシーの屋根にのって走ってみたり、ユニオン・スクエアの噴水にとびこんでみたりという、騒々しく華やかな生活と重ね合わせてみれば、作品の解釈は違ったものとなるかもしれない。

Notes

- (1) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, ed. by Andrew Turnbull (New York: Scribner's, 1963), p. 145.
- (2) Kenneth Eble, *F. Scott Fitzgerald*. James E. Miller, *F. Scott Fitzgerald: His Art and His Technique*. Arthur Mizener, *The Far Side of Paradise: A Biography of F. Scott Fitzgerald*.
- (3) William Troy, "Scott Fitzgerald—the Authority of Failure" in *F. Scott Fitzgerald: A Collection of Critical Essays*, ed. by Arthur Mizener (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1963), p. 21.
- (4) F. Scott Fitzgerald, *The Crack-Up* (New York: New Directions, 1956), p. 87.
- (5) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, p. 145.
- (6) F. Scott Fitzgerald, *The Beautiful and Damned* (New York: Scribner's, 1950), p. 8. 以下、この本からの引用は、すべて本文中の()内にページを記す。
- (7) Arthur Mizener, "F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby*" in *The Voice of America's Forum Lectures on the American Novel*, p. 129.

- (8) F. Scott Fitzgerald, "The Rich Boy" in *The Stories of F. Scott Fitzgerald* (New York : Scribner's, 1969), p. 177.
- (9) F. Scott Fitzgerald, "Winter Dreams" in *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, p. 145.
- (10) "Winter Dreams," p. 145.
- (11) *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, p. 353.
- (12) Edmund Wilson, "F. Scott Fitzgerald" in *F. Scott Fitzgerald : A Collection of Critical Essays*, p. 83.